

9 第一次世界大戦における陸軍航空医学

黒澤嘉幸

大正元年十一月、陸軍は特別大演習を実施した。この大演習は埼玉県所沢を中心にして、北は松山方面、南は立川、多摩川右岸にいたる広い地域で、師団対抗の遭遇戦を行うものであった。

当時陸軍の偵察は騎兵部隊の任務であったが、遭遇戦の場合、騎兵隊が敵の進行方向、兵力の配置等を明確に把握し、司令部に報告できるのは、精々兩軍の衝突の直前のころであった。

しかし、本演習には所沢飛行場から徳川大尉、木村中尉の二機が特別に演習に参加したため、演習開始一時間後には敵の兵力、位置、進行方向を明確にすることができた。このため、陸軍関係者は航空機なくして今後の戦争を戦うことは出来ないことを痛感したのである。

大正三年七月第一次大戦が始まった時、交戦国の第一戦飛行機の保有数は仏国一三八機、英国六三機、ドイツ一三〇機であった。

開戦と同時に両軍の航空機は偵察機として活用され、敵の布陣や移動を的確に把握して友軍の作戦行動に大きな成果をあげた。また友軍の砲撃時の弾着観測にも役立つたのである。

大戦初期に使われた航空機的能力はフランスのアンリ・ファルマンが最高時速百キロメートル、上昇限度二七五〇メートル、航続時間は三時間三十分であった。またドイツのアルバトロスも最大速度一〇五キロメートル、上昇限度三〇〇〇メートルであった。

そのため両軍はこの偵察機を駆逐できる航空機の開発に全力を傾けた。その結果出現した航空機はドイツのフオッカーやフランスのニューポールなどであった。その特長はプロペラに同調して銃弾を発射できる固定機関銃を装備して敵の飛行機を攻撃することであった。

これらの航空機は性能が大幅に向上し、時速一七〇キロメートル、上昇高度四〇〇〇メートルにおよぶように

なった。

これらの航空機は戦斗機とよばれ、空中における格闘を主な任務とした。そのため旋回、宙返り、急上昇、急降下等の出来る能力を持っていたため、従来機にくらべ、搭乗員に大きな負荷をかけるようになった。

このように大戦中の航空機の所要は年々たかまったので、第一次大戦終了時の各国の第一線機保有数はフランス三二五七機、ドイツ二七三〇機、イギリス一七五八機になっていた。

この大戦における航空機の活躍にかんがみ、陸軍は航空兵力の強化に乗り出したのである。

大正七年陸軍は陸軍省に航空課を新設し、航空兵力育成の業務計画作成を担当させることになった。

大正八年には陸軍航空部を新設し、航空に関する事項の調査、研究及び立案、航空兵諸軍隊本科専門教育の整一進歩ならびに航空に関する器材の製造、修理、購買、貯蔵、補給及び検査を司ることになった。

さらに大正八年には所沢航空学校、大正十年には下志津分校、明野分校を開校した。

このような航空兵力の強化を行うにあたっては、不適格操縦者の排除は航空機の特性上要務であった。

大正九年四月二四日、「身体検査は一般の陸軍身体検査手続による外、更に特種の複雑精密なる検査を要するをもってこれが規則を研究制定する」という趣旨にもとづき、一六名の航空身体検査規則制定委員が発令されたのである。